25 済生学舎廃校後の各種講習会及び私立東京医学校・私立日本医学校

唐沢信安

㈠ 済生学舎の廃校と残された医学生

明治三十六年八月三十一日、長谷川泰は二十八年間経営して来た「済生学舎」を廃校にして、郷里新潟に墓参と称して旅立った。夏期休暇を終えて上京した七百余の学生は、青天の霹靂と驚き奔走した。

以後済生学舎の旧学生や講師達が如何にして勉学を続け、学校を興したかについて述べたい。

旧済生学舎の学生の幹部、園田重徳・鈴木寿一・篠田穣・鳥羽廉平の四名は協議の上、済生学舎廃校後の善後策として旧講師を歴訪して講義の再開を懇請して歩いた。

更に翌日、(明治三十六年九月一日)一篇の檄文を書き学生達に呼びかけた。

「謹みて旧済生学舎生徒諸君に告ぐ!!

明治九年、済生学舎の創立せられて二十八年、その間数千人の医師を養成し、社会の要求に貢献して来た。政府は今回医学教育の完全を求めて専門学校令を発布した。(一部略)我々は時運の潮流に棹さして奮励努力したが、結果的に大打撃を受けて、済生学舎は廃校となった。嗚呼何たる痛恨ぞ。(一部略)

宜しく勉励せんと欲する学生は、来る九月四日午後一時に、本郷春木町の中央会堂に参集せよ。

明治三十六年九月一日

園田重徳・鈴木寿一・篠田穣・鳥羽廉平

旧済生学舎全生徒各位」

㈡ 同窓医学講習会の結成

右の檄文を読み、最も同情を寄せたのは旧済生学舎の講師、石川清忠・竹崎季薫・曲淵景章・飯盛挺造の四名であった。

中央会堂に参集した学生達は、石川清忠等旧講師と協議の上、「同窓医学講習会」を結成し、九月十日より講義を続ける事となった。校舎は神田三崎町一丁目十一番地の大成館の跡を借りる事とした。臨床実習は高田耕安講

師・馬島永徳講師の病院を利用した。総計十二名の旧講師が献身的な行為で講義を行った。また本郷区の住民は街の衰退することを憂い、寄附金を募集して協力した。

更に北里柴三郎・浅川範彦・佐藤進の三医学博士の協力と、旧済生学舎卒業生百七十五名の賛同者を得た(石川清忠は医学専門学校設立の運動を起こしたが、文部省は認めなかった)。そこで、石川清忠等は同年十二月二十日、本郷区有志の世話で、三崎町の校舎から、本郷区千駄木町五十九番地の旧東京女学校の新築校舎に移転し、「私立東京医学校」として届書を文部省及東京府知事に提出した(明治三十七年三月二十一日)。

㈢ 「医学研究会」の結成と「日本医学校」

ここで桂秀馬主催・川上元治郎後援の「医学研究会」の結成について述べたい。

石川清忠主催の「同窓医学講習会」では、明治三十六年十一月、後期の学生園田重徳等約百余名の人々が、講習会に不満をもち、反旗を翻し、東京医師倶楽部(神田美土代町二丁目一番地)内の医学講習会に走った。

元来、医学講習会は東京府内の医家の書生に医学を講述し、医術開業試験を受験させる目的で明治三十五年一月に設立されていた(金杉英五郎会長・夜学)。

右の医学講習会に、同窓医学講習会の後期生のみ、二百二十二名が脱会して参集した。そこで「医学研究会」と命名し、済生学舎の外科学講師の「桂秀馬」が責任者となり、「川上元治郎」が後援会長の役職につき、八名の講師が熱心に講義を続ける事となった。

翌年の明治三十七年三月二十七日、百五十二名に卒業試験を行った上、修業証書を渡した(約七十名が残った)。

所が、急に日露戦争が勃発し、軍医の不足を来し、文部省は、医学専門学校令を凍結し、私立医学校の存続を認めた。そこで川上元治郎は桂秀馬と相談の上、川上の友人で、前警察医長、衆議院議員の「山根正次」に懇請し、残りの医学生の教育を依頼した。ここに「日本医学校」が誕生した。

明治四十三年三月、協議の上、私立東京医学校と日本医学校は合併し、財団法人「日本医学専門学校」として生き残った。

(日本医科大学)